

BOOKデータベース

過去・現在・未来
制作の立場から

日外アソシエーツ(株)
森岡 浩

BOOKデータベースとは

- ・書籍の内容情報データベースとして、1986年に開始
- ・(株)トーハン・日本出版販売(株)・(株)紀伊國屋書店・日外の共同構築
- ・国内で一般書店に流通する書籍が対象
→直販本・非流通本・地域資料などは除外
- ・一般書籍でも、コミック・ムック・学習参考書は対象外
- ・年間約6万点をデータベース化
- ・ネット書店や図書館に情報を毎日提供

その特徴は？

- ・**すべて現物から構築**
- ・店頭と並ぶのとほぼ同時に配信
- ・豊富な内容紹介(目次や帯情報など)
- ・検索に役立つ多彩なキーワード
- ・著者情報・画像情報などオプションも充実

実は、

- ・「これからでる本」を利用しては？
 - ・広告を利用しては？
- ⇒本が刊行される前にデータが欲しい
・・・という要求は強い

しかし、

- ・タイトルが変わる
 - ・ページ数が変わる
 - ・刊行日が変わる
 - ・著者が変わる
 - ・出ない
- ⇒ **事実からつくりあげるデータベースではなくなる**

事実からつくるデータベースとは

地道な作業の積みかさねの上にできあがる

書籍データベースであれば、1点ずつ実際の本をもとに構築する

既存のデータを切り貼りしたデータベースは底が浅い

実際の採録の様子



コピーした書籍の束



毎日、250～300冊の新刊書籍を登録

この、
30年の積み重ねこそが
BOOKデータベースの強み

BOOKデータベースの歴史(1986～)

黎明期

- ・年間点数3万点程度
- ・提供はパソコン通信
- ・利用者はサーチャーと呼ばれるプロ
- ・利用料金は時間課金
- ・当時はパソコン通信を利用する人自体が少なく、まずは潜在顧客をみつけることから



BOOKデータベースの歴史

発展期

- ・パソコン通信が普及、ビジネスでも利用
- ・検索のプロ、サーチャーが市民権を得て拡大
- ・Nifty-Serveと提携(1988年)
- ・PC-VANと接続(1990年)
- ・1994年には30ネット、150万ユーザに拡大
- ・唯一の書籍総合データベースとして利用が拡大

BOOKデータベースの歴史

転換期

- ・商用インターネットが始まる(1994年)
- ・WEBサービスの開始(1997年)・・・WEBベースへの出遅れ
- ・WEBは無料？
- ・パソコン通信も時間課金から件数課金へ
- ・パソコン通信全体の急激な縮小

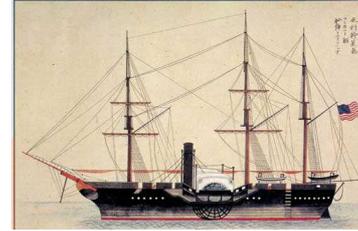
BOOKデータベースの歴史

低迷期

- ・“WEBは無料”の壁
- ・図書館が蔵書検索サイトを開設し始める
- ・件数単価で有料の書籍情報を購入する動機の低下(内容より価格！)
- ・図書館への導入を図るも、低価格のため大きな売上にはならず

⇒個人向けの有料書籍情報サービスとしての危機を迎える
B to C というビジネスモデルの危機

ところが、その時



黒船の到来… **amazon** がやって来た！

BOOKデータベースの歴史

・Amazonが上陸(2000年)

その要求は、

リアル書店での立ち読みのように、内容のわかる詳細なデータ

古い書籍や売れ筋以外の書籍も含めた網羅的なデータ

※ロングテール用の情報として

検索用の豊富なキーワード

⇒ **B to B to C** の商品として、エンドユーザ(個人)は無料で利用

BOOKデータベースの歴史

再興期

・Amazonの基礎情報としてBOOKデータベースが再認識される

・ネット書店が次々と設立、各社に提供を始める

⇒ 1986年以降の15年分を一举に販売することで売り上げが拡大



BOOKデータベースの歴史

競争期

・ライバル企業が登場、競争の時代へ

・ネット書店からは、発売日までのデータ提供を要請される…制作期間の短縮

→ 図書館時代はスピードは要求されなかった…経費の拡大へ

・ネット書店の乱立に歯止めがかかる

→ バックデータの一括販売の機会が激減

・画像情報、著者情報などの周辺データも構築して差別化

→ 販売先の目途よりもとにかく構築を開始

BOOKデータベースの歴史

雌伏期

・ネット書店が淘汰される時代へ

→ 販売先減少となり、売上の減少

・一部ネット書店が画像を版元からの登録に

・書籍点数の増加(6万点超)による経費の拡大

～技術面から新しい波が到来～

それが、**ASP**(Application Service Provider)という仕組み

インターネットを通じてアプリを呼びだして利用する
→ ユーザが自社開発をする必要がない

ならば、データもASPで取得すれば、
利用者は詳細な入力さえ不要になるはず

BOOKデータASPサービスの誕生

BOOKデータASPサービスとは

利用者が**日外のASPサーバにISBNでリクエスト**すると、
該当する書籍の**書誌情報や内容・要旨**などが、一定の書式で**返戻**される。
受け取った側(図書館など)は、**自らのデータと合成して画面**に表示する。

BOOKデータASPサービスの仕組み



BOOKデータASPサービスとは

利用者は**検索システムや大量のデータを持つ必要がない**
データは購入するのではなく、**利用権のみのため安価**

図書館で目次や内容が表示されることで、利用が増加
書籍の認知度アップにつながる

⇒図書館、版元双方の利益になる

BOOKデータベースの歴史

3たび復活！

・ASP機能の導入により、
図書館の持っている基本書誌にリッチなデータを付加するサービスが可能に

→再び図書館がマーケットとして浮上

※単価は安い、ネット書店と違って図書館は数が多い

BOOKデータベースの歴史

3たび復活！

- ・さらに、ASPを利用した画像の配信も開始
書籍検索は画像を表示した方が圧倒的に利用されやすい
ただし、権利関係の問題で、公共図書館は利用しづらかった
- ・約1,000社の版元から図書館での書影利用の許諾を得る
→公共図書館より、「許諾済の画像」として引き合い

まとめ

変遷1 (顧客の視点から)

- | | |
|---------------------------|-------------|
| どこにもないデータとしてスタート | 顧客＝一般個人 |
| パソコン通信の広がりですーチャーに人気 | 顧客＝プロの個人 |
| WEB移行で「ネットは無料」という潮流に流され苦戦 | 顧客＝一般個人・図書館 |
| ネット書店の登場で一躍脚光 | 顧客＝ネット書店 |
| ライバルの登場と競争の激化で苦戦 | 顧客＝ネット書店 |
| ASPへの対応でマーケットの軸足を移して復活 | 顧客＝図書館 |

まとめ

変遷2 (要求の視点から)

- | | |
|---------------------------|--------------|
| どこにもないデータとしてスタート | 要求＝とくになし |
| パソコン通信の広がりですーチャーに人気 | 要求＝詳細な検索 |
| WEB移行で「ネットは無料」という潮流に流され苦戦 | 要求＝無料 |
| ネット書店の登場で一躍脚光 | 要求＝網羅的な情報 |
| ライバルの登場と競争の激化で苦戦 | 要求＝スピード・付加情報 |
| ASPへの対応でマーケットの軸足を移して復活 | 要求＝リッチな情報 |

まとめ

- ・技術の発達により、刻々と状況が変化する
→顧客の変化
→要求の変化
- ・低迷期に構築を停止してしまうと、復活はありえない
- ・新しい技術にのる対応力が必要
- ・投資による蓄積が必須
→過去分の一挙販売で投資を回収
→ライバル企業との差(遡って構築することは不可能)

BOOKデータベースの未来は？

正直、わからない

ただし、「備えあれば憂いなし」

一喜一憂せず、ゆるぎない信念で着実な構築とを続けることで展望は開けるはず

BOOKデータベース構築の信念とは

すべて現物を手にし、現物から構築。

事実のみに基づくデータベースづくり。

ものが出来る前の情報は、“憶測”の域を出ない

スピードを追及することと、事実に基づかないデータを構築することとは別物である

引き続き、
営業部門からのご案内になります